

タイにおける伝統舞踊教育

— その歴史の変遷と現代における伝承と創作の共存 —

岩 澤 孝 子

In Thailand the dance education has been introduced into the school since the beginning of the 20th century and developed in a unique way. Firstly dance is categorized as one of the art subjects. Secondly the main genre in dance education is not western dance but Thai traditional one. Thirdly people graduated from dance major could have opportunities to become dance teacher in school. Last the higher education for dance major student is developed and organized very well. Moreover in the 21st century Thai dance education, especially one in the higher education system, was drastically changed: the nation-wide reformation for the faculty of education —from 4 into 5 year degree—, the introduction of contemporary dance into the curriculum for Thai dance major and so forth.

This paper focused on history as well as current situation of Thai dance education. The objectives of this research are two higher education schools: *Withhayalay Natasin* [the College of Dramatic Arts], which has played a center role of dance education in Thailand, and *Sataban bandit Phatanasin* [Banditpatanasilpa Institute]. Through the examination of my research date, I analyzed how they can make Thai traditional dance regenerated in contemporary Thailand.

1. はじめに：タイにおける伝統舞踊教育

20世紀初頭、タイにおける舞踊教育は学制に導入され、学校を舞台に展開してきた。なかでも、自国の伝統舞踊（「タイの伝統舞踊」の詳細については後述）がその中核をなしている。義務教育（初等教育課程六年と中等教育課程初級三年の九年間）から高等教育課程にいたるまで、タイにおける舞踊の学習は、私設空間よりむしろ学校という公共空間の中で発展し、充実してきた。

日本の現状との比較という観点から考えると、タイにおける舞踊教育の特徴として、第一に、タイでは舞踊が芸術科目に属するものであるということ¹（日本では、基本的に体育の一部に属する）、第二に、舞踊教育の内容は、自国の伝統舞踊を中心に行われているということ、第三に、専門教育のみならず普通教育においても伝統舞踊がカリキュラムに含まれているため、伝統舞踊を専門に学んだ者が学校教育の現場で職を得ることができること、そして第四に、職業としての舞踊（学校の教科教員）が社会的に認知されることと関連して大学などの高等教育課程における舞踊教育が充実しているということ、の四点をあげることができる。

タイの普通学校における芸術科目には、美術（タサナシン）、舞踊（ナータシン）、音楽（ドントリー）の三種類がある。国立私立の別に限らず、初等教育からタイの学校には芸術専門教員がいる。しかし、芸術科目を担当する専任教員の人数や配置は

学校の規模や経済的状况等によって異なっている。そのため、必ずしも舞踊専門の教員がすべての学校に配属されているわけではないが、高等教育のレベルまで伝統舞踊を専門に学んだ者にとって、安定した職業を得られる機会があるのは事実である。自国の伝統文化の継承者（理解者）の育成という観点から、タイにおける伝統舞踊を教える専門教育機関の果たす役割は大きい。

このようなタイの舞踊教育事情を考えると、伝統舞踊の専門教育機関、特に教育者やプロのダンサーを多く輩出してきた高等教育の実践に着目することが重要であるとわかる。筆者は、「伝統芸能教育の現在-タイ学制における伝統芸能教育を事例として-」[岩澤 2000]において、1990年代後半に実施した現地調査をもとに、自国の伝統文化を奨励する国の文化政策を背景としたタイ学制における伝統舞踊教育の実践について明らかにした。さらに、2000年代になって、大学を中心とした高等教育の改革、そして、現代的な舞踊創作の影響を受けて、タイにおける（伝統）舞踊の教育事情は新たな段階に入ったことが見えてきた。

本論文では、ウィッタヤーライ・ナータシン（国立演劇舞踊学校）およびサターバンバンディット・パタナーシン（パタナーシン芸術大学）の二つの教育機関を対象とし、現地で実施した参与観察や聞き取り調査、アンケート調査などにもとづく資料を分析し、タイにおける伝統舞踊の教育状況について、歴史の変遷および現代における伝承と創作の共存という二つの観点から明らかにする。

2. タイにおける舞踊専門教育、その歴史の変遷

2-1. ウィッタヤーライ・ナータシン (国立演劇舞踊学校)の歴史

タイにおいて、伝統芸能を専門とした中等教育および高等教育の中心は、ウィッタヤーライ・ナータシンと呼ばれる芸能専門学校にある。現在全国に12校存在する国立演劇舞踊学校が、タイ伝統芸能の後継者育成機関として大きな影響力を持っているというのは、国立演劇舞踊学校の卒業生の多くが全国の学校現場で舞踊教育を担っていることから容易に推察できる。

国立演劇舞踊学校の誕生は1932年におきた立憲革命、すなわち、絶対王政の崩壊により余儀なくされた宮廷専属舞踊団の解散と密接に結びついている。1934年、タイ国初の芸術局長、ルワン・ウィットトワータカーン氏の提案によって、宮廷

舞踊団に所属した舞踊家や音楽家たちを教師に迎え、国内初の音楽舞踊学校「ロングリアン・ナータドゥリヤーンカサート」が誕生した〔*Withayalai Natasin* 1994: 30〕ⁱⁱ。ロングリアン・ナータドゥリヤーンカサートがタイの首都バンコクにある王族の宮殿「ワン・ナー（前宮）」に作られたのも、宮廷で花開いた伝統芸能を継承する場としての期待があったからと推察される。タイの伝統芸能を中心に上演する国立劇場も国立演劇舞踊学校と隣接して建てられており、このエリアは、まさに、タイの伝統芸能の象徴として機能するようになったⁱⁱⁱ。

表1にあるように、ロングリアン・ナータドゥリヤーンカサートは、1942年に「ロングリアン・サンキート」、1945年に「ロングリアン・ナータシン」、1972年に現在の名称である「ウィッタヤーライ・ナータシン」になった。このように、少し

年	舞踊学校関連史	備考
1932	立憲革命による宮廷舞踊団の解散	
1934	タイ国初の国立音楽舞踊学校「ロングリアン・ナータドゥリヤーンカサート」創立	芸能科目と普通科目を採用した
1942	「ロングリアン・ナータドゥリヤーンカサート」は「ロングリアン・サンキート」へ名称変更	
1942-45	第二次世界大戦中、一時休校	
1945	戦時中、休校状態だった「ロングリアン・サンキート」が、タイ国の芸能文化の継承（後進の育成）と保存、普及を目指し、「ロングリアン・ナータシン」に名称変更	旧学の在学生在で復学したのは女子学生のための33人。男子学生60人の追加募集を行った。 ロングリアン・ナータシンではタイ国の芸能のみならず、西洋音楽および舞踊の専科が増設された。
1972	ロングリアン・ナータシン→「ウィッタヤーライ・ナータシン（国立演劇舞踊学校）」として名称変更し、中等教育（前期および後期）と高等教育（短期大学）をあわせた8年制教育機関となる	
1976	ラーチャモンコン工科大学に芸能専攻科の学士課程開設（国内初）	ウィッタヤーライ・ナータシンの卒業生は、ラーチャモンコン工科大学の3年時へ編入し、2年間修学し、学士号を取得できる
1978	ウィッタヤーライ・ナータシン・チェンマイ（チェンマイ校）創立 ウィッタヤーライ・ナータシン・アントーン（アントーン校）創立 ウィッタヤーライ・ナータシン・ナコンシータマラート（ナコンシータマラート校）創立	
1979	ウィッタヤーライ・ナータシン・スコータイ（スコータイ校）創立 ウィッタヤーライ・ナータシン・ロイエット（ロイエット校）創立	
1981	ウィッタヤーライ・ナータシン・ロップリー（ロップリー校）創立	
1982	ウィッタヤーライ・ナータシン・カラシン（カラシン校）創立	
1984	ウィッタヤーライ・ナータシン・パッタラン（パッタラン校）創立 ウィッタヤーライ・ナータシン・チャンタプリー（チャンタプリー校）創立	
1992	ウィッタヤーライ・ナータシン・ナコンラーチャシーマー（ナコンラーチャシーマー校）創立	
1993	ウィッタヤーライ・ナータシン・スパンブリー（スパンブリー校）創立	
1998	サターバンバンディット・パタナーシン（パタナーシン芸術大学）創立	
2004	全国大学の教育学部、教育課程が4年制から5年制へ	教育改正に伴い、パタナーシン芸術大学の学部再編。美術学部、芸術学部に加え、新たに教育学部が加わる
2008	パタナーシン芸術大学が完成年度に至ったために、ウィッタヤーライ・ナータシンの高等課程（ディプロマ）が閉校され、中等教育機関（前期および後期）として再編される。	校舎が従来のバンコクキャンパスからナコンバトム県サラヤー・キャンパスへ完全移転

表1. タイ国立舞踊学校 関連年表（筆者作成）

ずつ変更を重ねながら、その教育組織と内容を形成してきた(表1参照)。

第二次世界大戦後の1945年、「ロングリアン・ナータシン」に名称変更して学校を再開した時、自国の芸能文化の保存・継承・普及に重点を置くと共に、西洋音楽および舞踊の専科が増設された。これは現在も続いているが、校内における「タイ対非タイ(西洋)」のバランスは不均質なままである。タイは自国の民族文化を奨励する文化政策を推進してきたために、西洋音楽科・舞踊科は、経済的な支援が得られず、施設の充実が困難であるという点が問題になっている^{iv}。

1972年「ウィットヤーライ・ナータシン(国立演劇舞踊学校)」と現在の名称へ変更するとともに、中等教育(初級3年および上級3年)と高等教育(ディプロマ2年)をあわせた八年制の教育組織になった。

さらに、1978年チェンマイ校の設立をきっかけに、1970年代後半から90年代初頭にかけて、全国に11校の分校が設立された。分校は、バンコク校のカリキュラムをスタンダードとし、画一的な伝統舞踊教育が全国に普及した。

1972年以来、国立演劇舞踊学校は、2年間のディプロマ課程を有していたことで、高等教育機関として長らく認知され、ある種の正統性を保ってきたと考えられる。しかし、筆者が現地調査を行っていた2008年3月、国立演劇舞踊学校の高等教育課程が廃止され、中等教育機関へと組織再編がなされた。これは、国立演劇舞踊学校にとって大きな変化であったと考えられる。

2-2. 国立演劇舞踊学校の教育内容

国立演劇舞踊学校は、設立当初から、専門科目(芸能)と普通科目の二種類をおよそ50パーセントずつ取り入れたカリキュラムを採用しており、学生たちは、1日のうち約3時間を専門科目である舞踊の実技授業に費やしている。このカリキュラムは現在も続けられている。

現在、国立演劇舞踊学校はタイ舞踊、タイ音楽(器楽)、タイ声楽、西洋音楽(器楽)、声楽、西洋舞踊の六つの専門コースからなる[Iwasawa 2009: 153, 2011: 10]。さらに、タイ舞踊科は、女子学生のための「ラコーン・コース」と男子学生のための「コーン・コース」の2コースにわかれる。ラコーンとは、タイの古典演劇である舞踊劇の総称であり^v、また、コーンは仮面舞踊劇をさす。タイの古典舞踊劇には、①ブラ(人間の男性、天人)、②ナーン(人間の女性あるいは天女)、③ヤック(鬼)、④リン(猿)といった4つの主要なキャラクターがあるが、中でも③と④は、仮面劇コーンに登場する独特のキャラクターである。仮面劇コーンが表現するのは、インド古代の叙事詩とし

て名高い『ラーマヤナ』の物語世界のみである。タイにおいて、インド伝来のこの物語は『ラーマキアン(ラーマの栄光)』というタイ語名で知られ、独自の発展をしてきた。「ブラ」というキャラクターに属する主人公ラーマ王子とその宿敵である「ヤック」(鬼の王はトッサカンという名で知られる)、そして、ラーマ王子の見方となって鬼軍と激しい戦闘を繰り広げる「リン(猿)」たち。そして、ラーマ王子の妻であり、トッサカンに奪われて両軍の戦いのきっかけとなったシータ姫を筆頭に、「ナーン」と呼ばれる女性キャラクターの4種類が登場する。もう一方のラコーン・コースにおけるブラとナーンというキャラクターは、かつてタイの宮廷で発展した「ラコーン・ナイ」とよばれる女性舞踊劇に由来する。女性だけが演じる優美な舞踊劇ラコーン・ナイの、男性によるブラ(男役)とはひと味違った女性によるブラ(男役)の伝統が現在も引き継がれている。

タイ舞踊科でこのような分類がなされているのは、舞踊の習得過程が、古典舞踊劇(ラコーンおよびコーン)を構成する主要なキャラクターによって異なるからである。国立演劇舞踊学校では、入学時に学生のキャラクターを決め、それぞれのカリキュラムに従って指導を行う。これら5種類の主要なキャラクターわけが重要なのは、それぞれ独自の舞踊型、身体技法を有しているからである。図1、2は、国立演劇舞踊学校の中等課程初級で実践されている舞踊の基本的な型を学ぶ生徒たちの様子である。写真からもわかる通り、基本的な身体の使い方が異なっている(図1、2参照)。入学後、自身の属するキャラクターの型を身体に刻み込んでいき、多様な舞踊型を習得するのである。国立演劇舞踊学校のみならずその他のタイの



図1. 国立演劇舞踊学校 中等科初級(ラコーン・コース)のレッスン(2007年9月4日筆者撮影)。

左側の白いシャツの女子生徒が「ナーン」、右側緑色のシャツを着た女性生徒が「ブラ」のキャラクターの踊り方を学んでいる。あげた片足の型からその舞踊の型の違いがよくわかる。



図2. 国立演劇舞踊学校 中等科初級（コーン・コース）のレッスン（2007年9月4日筆者撮影）。コーンの3つのキャラクターのうち、ヤックの基本的な動きを学んでいる生徒たち。

舞踊専門教育機関において、このようなキャラクター分けを行い、その身体技法獲得を中心に、生涯にわたって習得することが、タイでは一般的である。

タイの伝統舞踊と一口にいても、その内容は多岐にわたっている。古典舞踊劇のラコーン、そして仮面舞踊劇のコーンといった舞踊劇における舞踊とその他の民俗舞踊等を総称して、「タイ舞踊」と呼ぶ。国立演劇舞踊学校タイ舞踊科のように、舞踊を専門に指導する教育機関の目標は舞踊劇を踊れる身体を作ることにあるが、それ以外に、

民間で伝承されてきた様々な舞踊曲も学習内容に採用されている。

国立演劇舞踊学校は現在二学期制を採用しており、学年毎または学期毎に学ぶ舞踊のレパートリーが決められている。2007年度に筆者が参与観察を行った中等課程上級三年生ラコーン・コースでは、そのカリキュラムにおいて、前期に8曲、後期に5曲の舞踊曲を習得していた。また、国立演劇舞踊学校で採用されているカリキュラムは、キャラクター毎に異なっている。中等課程上級3年の後期を例にとり、それぞれのキャラクターが学習する舞踊曲を比較すると、表2のようなになる（表2参照）^{vi}。表2から、舞踊劇に用いられる舞踊曲の学習においては、それぞれのキャラクターに応じて個別に学習するが、それ以外の舞踊曲の学習において、表2の「ラム・サットチャートリー」のように、学年全体を通じて同じ曲を学習する場合もみられる。

筆者が主として参与観察を行ったタイ舞踊科ラコーン・コースに所属する中等課程上級の三年生が受講する授業では、約100名の生徒に対し、9名の教員が担当していた。各曲の学習は、基本的にラコーン・コースの生徒全員が（プラ・ナーンの別はあるが）すべて集団で行われていた（図3参照）。観察から、生徒たちの舞踊の学習過程は、5の舞踊のレッスンを中心として、以下のようなプロセスで実践されることがわかった。

ラコーン・コース		コーン・コース		
ブラ	ナーン	ブラ	ヤック	リン
舞踊劇に用いられる舞踊曲				
「チュートチン」		「ヨックロップ」	「チュートチン（プレーンソーン）」	-
「ローム」「トラノーン」		「プロイマーウツパカーン」	「クラブワンターロップ」	-
「チャオ・リアックカイ」（『ブラロー』物語の一場面）		「ブララームタームクワーン」	-	-
-		「スックウサハットデーチャ・レ・ムーンブラップ」	-	-
-		「スックウィルンチャムバン」		「スックウィルンチャムバン」
-		-	「ナーカバート（トツサカンウクロップ）」	「ナーカバート」
その他の舞踊曲				
「ラム・サットチャートリー」	「ラム・サットチャートリー」	「ラム・サットチャートリー」	「ラム・サットチャートリー」	「ラム・サットチャートリー」
-	-	-	「フォン・ペーン」	-
「スーン・カヤン」	-	-	-	-

表2. 国立演劇舞踊学校 中等課程上級3年後期のカリキュラム比較（筆者作成）



図3. 国立演劇舞踊学校 タイ舞踊科ラコーン部
中等課程上級3年生 タイ舞踊レッスン

(2007年12月26日筆者撮影)

古典舞踊劇でしばしば演じられる「ルーム」。これは男女間のむつまじい愛の様子を表現している



図4. 東北地方の民俗舞踊曲「スーン・カヤン」の
小道具を作る学生 (2007年12月26日筆者撮影)



図5. グループで舞踊曲の新しいフォーメーションを
考える学生たち (2007年11月19日筆者撮影)

1. 舞踊曲の歴史的背景や概要（伴奏音楽、歌詞、舞踊劇の一シーンを表す舞踊曲の場合はその登場人物の性格）に関する基礎的知識をノートに記述する。
2. 衣装の写真を探し、ノートに添付してその詳細を説明する。
3. 衣装の一部、または、小道具を自分で作る。（図4参照）
4. 歌の試験（歌詞のある舞踊曲の場合にかぎる）^{vii}
5. 舞踊のレッスン（教員の模倣による型の習得）（図3参照）
6. 振付を記録する（「ナータヤサップ（舞踊言語）」と絵を併用した記述式の舞踊譜の作成）。
7. グループで、オリジナルの隊列（フォーメーション）を考案し（図5参照）、発表する。（群舞の場合に限る）
8. 担当グループが、1から6のプロセスで得た知識をもとに、舞踊曲を総合的に説明するボードを作成し、教室に展示する。
9. 舞踊の実技試験

上記の学習プロセスは舞踊曲毎に行われ、繰り返される。さらに、学期末に、1学期間に学習した舞踊の知識に関する筆記試験も実施されている。

高等教育になると、舞踊を専門に学ぶ学生は、より高度な古典舞踊曲の習得だけではなく、一方でタイ舞踊の伝統的なエッセンスを保持した新たな舞踊の創作が求められるようになる（後述）。ノート作成に伴う調査や新しいフォーメーションの提案などが学習内容に含まれているのを見ると、中等課程上級のカリキュラムは、単に舞踊の振りを覚えるのではなく、様々な面をもつ上演芸術であるタイ舞踊を総合的な観点から理解すること、その上で自らの創造性を伝統文化に融合させる手法を学べるような学習プログラムになっていると考えられる。

3. 高等教育における舞踊教育の発展と充実： パタナーシン芸術大学

タイの国立大学は、国立大学法人（15校）、国立大学（16校）、旧師範大学から総合大学へ改組したラーチャパット大学（40校）、ラーチャモンコン工科大学（9校）、その他の国立大学（12校）の計92校ある。その中で、専門的にタイの伝統舞踊の学べる学部を有する大学は、32校（関連学部は37学部）あり、国立大学全体の約3割にも及ぶ（表3参照）。

ここでは、国立演劇舞踊学校と密接な関係をもつサターバンバンディット・パタナーシン（パタナーシン芸術大学）の教育実践に焦点をあて、主

	大学	学部	場所
国立大学法人 (総数 15)			
1	Chulalongkorn University チュラロンコン大学	Faculty of Fine and Applied Arts (芸術学部)	バンコク都
2	Thaksin University タクシン大学	Faculty of Fine Arts (芸術学部)	ソンクラーク県
国立大学 (総数 16)			
3	Thammasart University タマサート大学	Faculty of Fine and Applied Arts (芸術学部)	バンコク都
4	Naresuan University ナレスワン大学	Faculty of Humanities (人文学部)	ピッサヌローク県
5	Maharakham University マハーサラカム大学	芸術学部	マハーサラカム県
6	Ramakhamhaeng University ラーマカムヘーン大学	芸術学部	バンコク都
7	Sirnakharinwirot University シーナカリンウィロート大学	芸術学部	バンコク都
8	Prince of Songkhla University, Pattani Campus ソンクラーク大学 パッタニー校	芸術学部	ソンクラーク県
9	Ubon Ratchathani University ウボンラーチャターニー大学	Faculty of Liberal Arts (文学部)	ウボンラーチャターニー県
ラーチャバット大学 (旧師範大学) (総数 40)			
10	Chandrakasem Rajabhat University チャンドラカセーン・ラーチャバット大学	人文社会学部	バンコク都
11	Chaing Mai Rajabhat University チェンマイ・ラーチャバット大学	人文社会学部	チェンマイ県
12	Dhonburi Rajabhat University ドンブリー・ラーチャバット大学	人文社会学部	バンコク都
13	Nakhon Ratchasima Rajabhat University ナコンラーチャーシーマー・ラーチャバット大学	人文社会学部	ナコンラーチャーシーマー県
14	Nakhon Si Thammarat Rajabhat University ナコンシータマラート・ラーチャバット大学	人文社会学部	ナコンシータマラート県
15	Bansomdejchaopraya Rajabhat University バーンソムデットチャオプラーヤ・ラーチャバット大学	人文社会学部 Faculty of Education (教育学部)	バンコク都 ブリーラム県
16	Buriram Rajabhat University ブリーラム・ラーチャバット大学	教育学部	
17	Phranakhon Rajabhat University プラナコン・ラーチャバット大学	人文社会学部	バンコク都
18	Phranakhon Si Ayutthaya Rajabhat University プラナコンシーアユタヤ・ラーチャバット大学	人文社会学部 教育学部	アユタヤ県
19	Phetchaburi Rajabhat University ベチャブリー・ラーチャバット大学	人文社会学部	ベチャブリー県
20	Phuket Rajabhat University プーケット・ラーチャバット大学	人文社会学部	プーケット県
21	Maha Sarakham Rajabhat University マハーサラカム・ラーチャバット大学	人文社会学部 教育学部	マハーサラカム県
22	Rajanagarindra Rajabhat University ラーチャナカリン・ラーチャバット大学	人文社会学部	チャチェンサオ県
23	Loei Rajabhat University ルーイ・ラーチャバット大学	人文社会学部	ルーイ県
24	Valaya Alongkorn Rajabhat University バラヤ・アーロンコン・ラーチャバット大学	人文社会学部	バンコク都
25	Songkhla Rajabhat University ソンクラーク・ラーチャバット大学	人文社会学部	ソンクラーク県
26	Suan Dusit Rajabhat University スワン・ドゥシット・ラーチャバット大学	人文社会学部	バンコク都
27	Suansunandha Rajabhat University スワンスナンター・ラーチャバット大学	人文社会学部	バンコク都
28	Surin Rajabhat University スリン・ラーチャバット大学	人文社会学部	スリン県
29	Ubon Thani Rajabhat University ウボンタニー・ラーチャバット大学	人文社会学部 教育学部	ウボンタニー県
30	Ubon Ratchathani Rajabhat University ウボンラーチャターニー・ラーチャバット大学	人文社会学部	ウボンラーチャターニー県
ラーチャモンコン工科大学 (総数 9)			
31	Rajamangala University of Technology Thanyaburi ラーチャモンコン工科大学タニャブリー校	芸術学部	バトゥンタニー県
その他の国立大学 (Institutes) (総数 12)			
32	Bunditpatanasilpa Institute バタナーシン芸術大学	Faculty of Music and Drama (音楽・演劇学部) Faculty of Arts Education (芸術教育学部)	バンコク都

表3. タイ国公立大学において伝統舞踊の専門教育(学部)を有する大学の一覧

に、2004年の教育改革前後の変化について、記述・考察したい。

先述の通り、国立演劇舞踊学校は、1972年、高等教育課程の二カ年を加えた8年制を開始した。しかし、次第に学士号取得の社会的需要が高まり、1976年ラーチャモンコン工科大学（タニヤブリー校）に、タイ国で初めて舞踊学科（学士）が誕生した。国立演劇舞踊学校の卒業生は、高等教育課程（2年）を修了すると、編入試験を受けて合格すれば、ラーチャモンコン工科大学の3年に編入できる仕組みになった。しかし、その後、他の総合大学や教育系大学において、舞踊科が設置されるようになり、国立演劇舞踊学校の卒業生の中にも、中等教育課程（6年）を修了した段階で、他大学へ進学する者もでてきた。このような状況を背景に、パタナーシン芸術大学が誕生したのである。パタナーシン芸術大学、演劇・音楽学部で学部長（2008年当時）をつとめ、National Artistの称号を持ち（2005年認定）、優れたタイ舞踊家でもあるスパチャイ氏によると、大学設立の経緯は以下の通りである。

1998年、パタナーシン芸術大学は、国立演劇舞踊学校と国立美術学校（ウィッタヤーライ・チャンシン）の高等教育機関として設立された。これは、既にディプロマ課程を有していた国立演劇舞踊学校と国立美術学校の学生たちが、学士号を取得するためのプログラムであった。そのため、設立当初は大学3-4年時に相当する二カ年の教育プログラムを有するのみであった。しかしながら、全国の教育学部が四年制から五年制へと再編された2004年の教育改革の際、これまでの大学組織では対応しきれなくなり、パタナーシン芸術大学は四年制大学（教育学部は五年制に移行）へ昇格し、現在の形になった。^{viii}

現在、パタナーシン芸術大学は美術学部、音楽・演劇学部、芸術教育学部の三学部からなる（表4参照）。

学部	学科
美術学部	タイ美術学科
	彫刻学科
	デザイン学科
音楽・演劇学部	タイ演劇舞踊学科
	タイ音楽学科
芸術教育学部	舞踊教育学科 [タイ舞踊, 西洋舞踊]
	音楽教育学科 [タイ音楽, 西洋音楽]
	教育学科

表4. パタナーシン芸術大学 学部・学科組織

2004年タイ全国で教育学部の五年制が導入された理由として、教員によるわいせつな行為など、社会規範を逸脱する行為が問題視されるようになり、これまでより長い教育実習が必要とされるようになったことがあげられている。五年制の導入によって、教育実習期間が延長され、これまで一学期間（半年）のみであったのが二学期間（一年）へ、また、実習先が初等学校校と中等学校の二校に増え、それぞれ半年ずつ教育実習へいくことが課されるようになった^{ix}。このように、修学期間が一年増えたにもかかわらず、教育学部の人気は根強く、パタナーシン芸術大学の芸術教育学部の学生数は、音楽・演劇学部の二倍以上を確保しているという^x。

パタナーシン芸術大学・芸術教育学部でタイ舞踊科の科長をつとめる（2008年当時）ニラワン女史への聞き取り調査から、教育実習の変化とその背景の他に、次のような変化が生じていることがわかった^{xi}。

第一に、教育学部の学生が取得できる教員資格は、従来通り、初等教育課程（小学校に相当）、中等教育課程初級（中学校）、中等教育課程上級（高校）の舞踊科目の専門教員である^{xii}。第二に、これらの教員養成課程を経た専門教員が、学校現場で担当する科目は、普通学校のクルムサーラシンラバ（芸術科目群）である。芸術科目には、美術・舞踊・音楽の三つが含まれており、赴任先の状況によっては、専門以外の美術や音楽を教えることも想定される。第三に、第二の状況に対応できるように、パタナーシン芸術大学では、音楽、美術の基礎知識を得ると共に、舞踊で学んだことを活かし応用して教える力も学んでいる。例としてあげられたのは、美術の場合で、これまでの舞踊学習の中で学んできたこと、たとえば、衣装や化粧の知識、小道具制作のスキルを活かして、美術の授業に応用するという方法である。もちろん、選択科目として、音楽や美術の教授法の授業はあるが、これらは必修ではなく選択科目である。以前はこのような他の専門領域への関心は薄かったが、地方の現状を鑑みると、すべての芸術科目を担当しなければならない可能性もあり、現在はカリキュラムが見直されようとしている。

4. 高等教育における現代の舞踊教育— 「今をいきる伝統芸能」という課題

パタナーシン芸術大学において、（タイ）舞踊教育における最も重要なポイントは、「伝統の継承と創作の共存」にある。これは、音楽・演劇学科においても、芸術教育学科においても同様で、

卒業までに必要な単位として、「古い舞踊の発掘」と「舞踊の創作」の二つが設定されていることから明らかである。これら二つの事項は他大学の舞踊科においても同様に実践されており、タイの伝統文化の保存と発展という国家的なミッションがカリキュラムに如実に現れていると考えられる。

パタナーシン芸術大学の立地は、国立劇場に隣接しており、人間国宝（National Artist）の称号を持つタイ舞踊のエキスパートが身近にいる他大学よりも好環境にある。その環境を活かし、古い舞踊、特に、現在ではあまり演じられなくなってきた貴重な舞踊を先輩舞踊家や師匠等との稽古を通して受け継ぐという保存プログラムがある。その他、タイ伝統舞踊の枠組みにおける新たな舞踊の創作（群舞）が卒業制作の課題となっている。この創作活動に新たな指針を与えるもののひとつに、タイにおけるコンテンポラリーダンスがあると考える。

4-1. 伝統と現代をつなぐ舞踊教育：

コンテンポラリーダンス授業の導入

20世紀末頃からタイでは、少しずつではあるが、コンテンポラリーダンス作品が制作され、上演されるようになってきた。タイの舞踊教育の多数派がタイの伝統舞踊であることから推察されるように、バレエやモダンダンスなど西洋舞踊がほとんど普及していないタイにおいて、コンテンポラリーダンスは、タイ舞踊の発展に寄与し、新たな創作の一助となるという考えをもつダンサーも少なくない。「コンテンポラリーダンス」略語として「コンテン」という略語が一部のダンサーの間で広まっていることから、少なくともその存在が認知されているという状況が伺える。

パタナーシン芸術大学では、そうした舞踊を取り巻く現代の傾向を踏まえて、数年前から、コンテンポラリーダンスの授業が導入された。その講師を務めているのが、パタナーシン芸術大学の卒業生でもあり、コモラゲンダンスカンパニーの代表をつとめるトンチャイ・ハナロンである。現代タイのコンテンポラリーダンス界における若きリーダーとして活躍している。大学で彼が教えるコンテンポラリーダンスは、あくまでタイ的な身体を活かした新しい身体表現の追求と創作にフォーカスしたもので、タイ舞踊家として現代を生き抜くためにコンテンポラリーダンスを踊るとはどういうことなのかを考えさせる興味深い授業であった。

筆者は、2007年8月から9月にかけて複数回にわたって、パタナーシン芸術大学でコンテンポラリーダンス授業の参与観察を行った。また、2007年9月には、受講生を対象とした自由記述形式のアンケート調査を実施した。受講生44人のうち19

人から回答を得た。

アンケートの質問内容は以下の通りである。

1. いつから舞踊学習を始めたか
2. どこで舞踊学習をはじめたか
3. タイ舞踊以外の舞踊学習経験があるか
4. コンテンポラリーダンス授業について
 - 4.1. 授業の印象
 - 4.2. 授業で学習した内容の中で一番好きなテクニックは何か
 - 4.3. 難しいと感じたテクニックは何か
 - 4.4. タイ舞踊とコンテンポラリーダンスのテクニックの違いは何か
 - 4.5. あなたにとってコンテンポラリーダンスとは何か

（対象：パタナーシン芸術大学 音楽・演劇学部
タイ舞踊科3年生）（実施 2009年9月）

質問1について、最も多い回答は、中等課程初級からの10人であり、質問2の回答と照合すると、彼らが国立演劇舞踊学校の出身者であることがわかった。アンケートの実施場所が国立演劇舞踊学校と密接な関係を持つパタナーシン芸術大学であったということもその大きな要因だが、タイ古典舞踊の道を志す者の多くが、少なくとも中等課程初級の時点から本格的に舞踊教育を受け始めていることが見てとれる。また、中等課程上級からはじめたという2名の他は、幼稚園や初等教育課程の時期から舞踊学習をスタートしたと回答しているが、彼らの多くが、クラブ活動や授業を通して、つまり、学校教育の範囲内で舞踊を学習してきたことも明らかになった。質問3については、大学で選択科目として開講しているインドネシア舞踊、日本舞踊のクラスに参加した学生が多くおり、10名の学生がこれら二つの民族舞踊を経験したことがあると回答している。一方タイ舞踊以外の学習経験がないと回答した学生は6名いた（その他、中等課程で学習したと回答した学生が3名あったが、その内容は不明）。この調査結果から導き出されるのは、タイ舞踊を専門に学ぶ対象学生たちが、西洋舞踊に全く触れていないという事実である。これらの学生にとって、コンテンポラリーダンスはどのように認識されているのであろうか。

次に、質問4-5に注目して、コンテンポラリーダンスに対する学生の意識について考察したい。

トンチャイ氏の授業は、初歩的なコンタクトインプロビゼーションや呼吸を利用した身体の使い方を習得させるようなエクササイズをはじめとして、ソロやペア、グループでの即興的な創作の手法を学んだ後、学期末にソロ作品を発表するという構成になっていた。また、授業では、タイ舞踊

の型を応用した創作の様子が多く見られた（図6参照）。図6は、コンタクトインプロビゼーション（ペア）のエクササイズで、即興的に振りをつけている学生たちの様子である。既にタイ舞踊の型を発展させる手法での即興創作について経験のある学生たちは、タイ舞踊独特の手の型（「ウォン」という反り手と「チープ」という型〔男子学生の左手の型〕）を使いながら、新たな表現にチャレ



図6. パタナーシン芸術大学 音楽・演劇学部
タイ舞踊科 コンテンポラリーダンス授業
タイ舞踊特有の手の型にコンタクトインプロビゼーションの要素を混ぜ合わせた即興舞踊の様子
(2007年8月6日筆者撮影)

ンジしている。また体の接触という観点で考えると、タイ舞踊では、他のダンサーとの接触はより小さい。コンタクトインプロビゼーションで、ペアが背中を接触させて動くというやり方は、タイ舞踊では通常行われることがないからである。このような新しい身体動作は学生たちに少なからず影響を与えているようだ。

アンケート結果（表5参照）から、学生たちは、既存の舞踊に何か新しいエッセンスを「混ぜ合わせること」がコンテンポラリーダンスだと認識していることがわかる。19の回答中、白紙回答が2あり、残りの有効回答17のうち、「混合」に関する語の記述は9あり、5割以上の学生がコンテンポラリーダンスを「従来の、既存のダンス（彼らにとってはタイ舞踊）に新しい要素を混ぜ合わせたダンス」と理解していると考えられる。

バレエやモダンダンスなど西洋舞踊を経験せず、タイの伝統舞踊を中心に学んできた学生にとって、身体を解き放ち、コンセプトを重視するコンテンポラリーダンスの世界を理解するのは困難なようだが、トンチャイ氏のコンテンポラリーダンス授業が、卒業制作等、新たな創作に必要なアイデアのヒントになっていると推察される。

	回答
1	タイ舞踊に美しさと新しさを加え混ぜ合わせた舞踊
2	進化。多種多様なものを混合して生じた新しい形
3	コンテンとは、決まった型がないパフォーマンスで、大部分は考え（コンセプト?）にある。
4	回答無し
5	回答無し
6	コンテンの基本的な考えは、正解も間違いもないということ。しかしコンテンにはコンテンの決まりがある。考え（コンセプトのことか?）を使う必要がある。その考えは変わっているもので、これまでにだれもやったことのないもの、テクニックやリズム、表情を使うことがあげられる。それができれば、コンテンとして成功したといえる。
7	二つ〔タイ舞踊とコンテン?〕を混ぜ合わせて新しいものを作った作品
8	今の時代にあるように応用すること。頭と体、呼吸も使ってそれらを一体にする
9	現代という時代に沿って発展したもの。現代のダンス。それは舞踊芸術を合わせてできたもの
10	現代的なものを混合して創り出されたもの。
11	古い時代そして新しい時代にもものを合わせて現代にあったものにする。合わせる、混合するという手法
12	古い舞踊を現代という時代にあうように応用し、今のダンスと合わせて美的にしたダンス。
13	自分の身の回りの事柄がすべてパフォーマンスになる、そのようなダンス。
14	これまであったものを今の時代にあうようにすること。でも、テクニックは既存のものを使い、それを混ぜ合わせる。
15	時代に合わせて発展してきたもの
16	コンテンとは、現代の舞踊芸術。現代の作品を考え創る人、また見る人の考えに従って創作することができる。どんなテクニックでも使うことができるし、決まりがない。しかし、作品にはコンセプト（考え）がなくてはならないし、見る人にそれを伝えなければならない。
17	（従来の?）芸術の枠組みに当てはまらない考え。つまり、自由な考えに基づく創作とその芸術
18	新しいタイプの混合ダンス。感覚に従って考え出されたダンス
19	決まりや制限のない現代のパフォーマンス

表5. アンケート結果（質問番号4-5）（筆者翻訳）

4-2. 卒業制作にみる伝統と新しい創作の共存可能性

パタナーシン芸術大学の学生にとって最も重要な課題は、卒業制作とそれに伴う論文作成である。学生たちは、古典舞踊の発掘と継承を目的とした「アヌラック (A)」と新たなタイ舞踊の創作「サーンサン (B)」の二つを行う^{xiii}。A, Bそれぞれのプロセスは以下の通りである。

- A. 「アヌラック」：古い舞踊の発掘と継承（ソロ作品の習得と上演）
 1. 文献資料や師匠への聞き取りによる調査
 2. 師匠のもとでの稽古
 3. 上演
 4. レポート作成
- B. 「サーンサン」：新しいタイ舞踊の創作（10分程度の群舞作品の創作と演出）
 1. コンセプト, タイトル, グランドデザインの決定
 2. 音楽, パフォーマーの選定
 3. コレオグラフィー, 衣装, 小道具の創作
 4. 上演
 5. 卒業論文作成

これらは、芸術教育学部および音楽・演劇学部両学部のタイ舞踊科で同様に行われている。しかし、Bについて、芸術教育学部は、8～10名程度のグループによる創作を課しているが、音楽・演劇学部では、3名以下の小グループが作品の創作および演出を担うという点で異なっている。作品の評価は、二回の間接発表を経て、最終上演で審査される。また、審査で最優秀に選ばれた作品は、新たなタイ舞踊作品と認められ、上演機会を多く得ることで、全国に普及していく。

最優秀作品に選ばれ、新たなタイ舞踊作品と認められた学生の卒業作品の例として、「チュット・クワンカーオ（「米の精霊」の意味）」というタイトルの作品（2007年度の最優秀作品）がある。これはタイ中央部の農民たちの生活を表現した作品で、田植えて実際に用いられた笠を象徴的な衣装道具に用い、田植えの姿を踊りのモチーフとした作品である。「新たなタイ舞踊」の創作において、学生たちに求められるのは、タイの伝統文化が有する価値観や信仰、習慣等といった、タイの伝統的なエッセンスを如何に舞踊で表現できるかということにある [Iwasawa 2011:15]。

学生たちが創作した作品群は、「現代という時代にあった作品の上演形態が求められる一方で、『タイ舞踊』として成立する作品」でなければならない^{xiv}。照明を含む舞台装置やフォーメーション（空間構成）、新しい衣装の考案など、現代的なチャレンジを加えながらも、地方での伝統文化

の実態調査を実施するなどして、タイの伝統文化に基づくテーマを盛り込んだ作品を目指す学生たちの地道な努力が容易に推察される。このような次世代を担う若者たちの努力によって、一見固定的に見られがちな伝統舞踊の世界が、現代のめまぐるしく変化する社会において、活性化されているのである。

5. 結語

本研究では、国立演劇舞踊学校とパタナーシン芸術大学という、タイの伝統舞踊専門教育において中心的な役割を果たしている教育機関を対象として、現地での文献資料収集や、参与観察、聞き取り調査、アンケート調査などの調査を実施し、その結果を分析・考察した。そこから明らかになったことには、第一に、タイ学制における伝統舞踊教育の歴史の変遷、第二に、これら舞踊専門の課程を有する学校における現在の教育プログラム、そして第三に、教員養成機関として、また伝統文化の後継者でありグローバルに活躍するタイ舞踊家を育成する機関として、舞踊学校が創出し発信しようとしている新しい舞踊創作のあり方である。特に第三の点において、タイの伝統舞踊が現代という時代の流れに沿いながら存在し続けるために、コンテンポラリーダンスに希望と可能性を見いだそうと考えていることもわかった。しかし、あくまで「タイ舞踊」という枠組みの中で創作を行うという制約があり、これに対して、どれほど挑戦していけるか、問題は残っている。表現としての「タイ舞踊」というフレームワークは、明文化される、または、単純に定義づけられる類のものではないだろう。コンテンポラリーダンスを経験し、創作手法と内容に刺激を受けた、次世代の舞踊家や教師たちによるこれからのタイ舞踊の形について、見守っていきたい。

筆者が現地調査を実施した2007年から2008年は、本研究の研究対象である国立演劇舞踊学校とパタナーシン芸術大学にとって、大きな転換点とも言える時期であった。2008年3月国立演劇舞踊学校は、1972年以来保持してきたディプロマ（高等教育課程二カ年）を廃止し、かつての王族の宮廷があったワン・ナーをからバンコク近郊の都市サラヤーへと完全に移転した。また、パタナーシン芸術大学では、2004年施行の教育改革を受けて、五年制に移行した芸術教育学部初の卒業生を輩出する時期と重なっている。このドラスティックな変化の時期と遭遇したことで、タイにおける舞踊教育のターニングポイントを記録し、それを分析することができた。その後、こうした変化に伴う現地の成果・評価について、検証が必要であり、今後の課題としたい。

主要参考文献

岩澤 孝子「伝統芸能教育の現在—タイ学制における伝統芸能教育を事例として—」『カリキュラム研究』第9号, 日本カリキュラム学会, pp.89-102, 2001

富岡 三智「ジャワ宮廷舞踊の正統性と継承をめぐる問題」『西洋比較演劇研究』No.9, 日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会, 2010, pp.47-66

Iwasawa, Takako 'Challenges of dance Artists in Contemporary Thailand: Tradition and Creations in "Asian Alternatives for a Sustainable World: Transborder Engagements in Knowledge Formation", 2009, pp.152-160. Tokyo, The Nippon Foundation

"Challenges of Dance Artists in Contemporary Thailand: Tradition and Creation" (the report submission to the National Research Council of Thailand 2008) 2011

Khana Silpasuksa, Sathaban bandit Phatanasilp, Kromsilpakon, Krathwangwatnatham [Faculty of Education, Institute of Fine Arts Development, Department of Arts, Ministry of Culture Thailand] 2004, "*Laksut Suksasart Bandit (Laksut Mai 2004)* [the new curriculum for Faculty of Education (2004)]", Thailand, 2004

Sathaban bandit Phatanasilp, Kromsilpakon, Krathwangwatnatham [Institute of Fine Arts Development, Department of Arts, Ministry of Culture Thailand], "*Laksut kansuksa khanphunthan 2544 khaung Withayalaynatasilp—klumsarakan rianru wichachip chapho pathibat ek-tho lae luakseri natasilp lakhon chuang chant hi 4 radap pratnityabat wichachip* [the curriculum for *lakhon* (major, minor, and selective subjects) in The College of Dramatic Arts 2001]", 2001a

"*Laksut kansuksa khanphunthan 2544 khaung Withayalaynatasilp—Klumsarakan rianru wichachip natasilp khon-phra chuang chant hi 4 radap pratnityabat wichachip* [the curriculum of *khon-phra* for the high school in The College of Dramatic Arts 2001]", 2001b

"*Laksut kansuksa khanphunthan 2544 khaung Withayalaynatasilp—Klumsarakan*

rianru wichachip natasilp khon-yak chuang chant hi 4 radap pratnityabat wichachip [the curriculum of *khon-yak* for the high school in The College of Dramatic Arts 2001]", 2001c

"*Laksut kansuksa khanphunthan 2544 khaung Withayalaynatasilp—Klumsarakan rianru wichachip natasilp khon-ling chuang chant hi 4 radap pratnityabat wichachip* [the curriculum of *khon-ling* for the high school in The College of Dramatic Arts 2001]", 2001d

Withayalai Natasin [The College of Dramatic Arts] "60 *pi Withayalai Natasin* [The 60th anniversary commemorative publication for the College of Dramatic Arts]", Prayuruang printing Ltd., 1994

ウェブサイト

サターバンバンディット・パタナーシン(パタナーシン芸術大学) 略史

<http://www.bpi.ac.th/bpi/bpdata.php?view=profile> (2012年2月25日最終閲覧)

ウィッタヤーライ・ナータシン(国立演劇舞踊学校) 略史

<http://cda.bpi.ac.th/pravat.htm> (2012年2月25日最終閲覧)

付記

本研究の一部は、2007年8月から2008年7月にうけた日本財団アジアフェロシップ(API)の助成による。表2(タイの伝統舞踊を専門に教える学部を有するタイ国公立大学の一覧資料)の作成にあたり、調査協力をしていただいたチュラロンコン大学のKumkom Pornprasit准教授、Pornprapit Phoasavadi助教授、さらには現地調査において、ご協力いただいたタイ国立演劇舞踊学校バンコク校並びにパタナーシン芸術大学の関係者の方々に対し、謝辞を呈する。

注)

ⁱ 義務教育課程の普通学校における舞踊の授業は、初等教育課程(小学校3年から6年時の必修科目)の道徳・芸術・体育を含む「情操教育」カテゴリーの「芸術」科目に、また、中等教育課程初級(選択科目)においては、保健体育・芸術を含む「人格形成」カテゴリーの「芸術」科目に属する(岩澤2001:92表1)。また、普通学校での舞踊専任教員は、芸術科目の授業実践のみならず、クラブ活動でも大きな役割を担っている。

ⁱⁱ 富岡は、インドネシア、特にジャワの宮廷舞踊文化が一般に普及するプロセスを、国立芸術学校の複雑な成立背景とも絡めながら詳細な記述と分析を行っている。「独立の翌年1950年、全国で初めて国立の

芸術学校（コンセルバトリ）スラカルタ校が（中略）、
宮廷人の手によって設立された」（富岡 2010: 51）
という。これはタイにおいて、ロングリアン・ナー
タドゥリヤーンカサートが1934年に開校したのと類
似した現象と言える。しかし、ジャワ（インドネシ
ア）の事例がタイと大きく異なるのは、ジャワでは、
1950年に芸術学校が開校されたにもかかわらず、宮
廷舞踊の解禁は1970年代以降であり、学校における
舞踊教育の充実と発展にギャップがあるという点で
あろう。

- iii 建物の老朽化と学生総数の増加に伴い、2007年3月
をもって、ウィッタヤーライ・ナータシンは、ワン・
ナーからバンコク近郊のナコン・パトム県サラヤー
郡へと移転した。ただし、長らくウィッタヤーライ・
ナータシンとこの場所を共有してきたパタナーシン
芸術大学が占有することになり、ワン・ナーの伝統
芸能後継者育成機関としての機能が完全に失われる
ことはなかった。
- iv 2007年の調査では、筆者が重点的に参与観察してい
た中等教育課程上級3年の在校生総数は、タイ舞踊
科が100名であったのに対し、西洋舞踊科は5名と相
当の差があった（Iwasawa 2011: 11）。
- v 「ラコーン」は、ドラマ、演劇をさすタイ語である。
舞踊を中心に物語が進行する演劇形式、舞踊劇を「ラ
コーン・ラム（ラムは「踊る」の意味）」、オペラの
ように歌・音楽を中心とした演劇を「ラコーン・ロー
ン（ローンは「歌う」の意味）」、台詞劇を「ラコーン・
プート（プートは「話す」の意味）」と呼び分ける
こともある。現在、「ラコーン」は、台詞劇を指す
ことの方が一般的だが、タイの伝統的な舞踊の文脈
において「ラコーン」は、「舞踊劇」のことを指す。
仮面舞踊劇「コーン」は『ラーマキアン』物語のみ
を演じる舞踊劇だが、ラコーンが演じる物語は多様
であり、また、その様式も多様である。
- vi タイの文科省・芸術局によるカリキュラム（資
料Sathaban bandit Phatanasilp, Kromsilpakon,
Krathwangwatnatham, 2001a, 2001b, 2001c, 2001d）
より、作成。
- vii 「当て振り」の要領で、タイ舞踊は歌詞の意味と振
りが連動している。そのため、振りの習得以前に、
歌を覚える必要がある。ただし、舞踊家が実際の舞
台で歌を歌うかどうかは、舞踊曲によって異なる。
- viii スパチャイ・チャンタスワン氏Dr. Suphachai
Jansuwan（パタナーシン芸術大学 演劇・音楽学部
学部長）へのインタビュー（2008年5月20日）による。
- ix ニラワン・タモンラッタサット女史Nirawan
Thamongratsat（パタナーシン芸術大学 芸術教育
学部 タイ舞踊科 学科長）へのインタビュー（2008
年5月20日）による。
- x ニラワン女史へのインタビュー（*op.cit.*）による。
- xi ニラワン女史へのインタビュー（*op.cit.*）による。
- xii 以前は、高等教育課程修了者（学士）でも、国立演
劇舞踊学校を含む高等教育の教員になることも多
かったが、現在では、少なくとも大学等の国立の高
等教育機関の教員は修士課程修了者を採用する傾向
にあり、学士が大学教員になるのが困難である。
- xiii スパチャイ氏（*op.cit.*）へのインタビューによる。
- xiv スパチャイ氏（*op.cit.*）へのインタビューによる。